

# 「ネクロポリティクス」の概念が問いかけるもの

このシンポジウムのプラットフォームのために

岩崎 稔

日本ではいまだ公開予定を耳にしていないが、『ホテル・ルワンダ Hotel Rwanda』という 2004 年に製作された映画（テリー・ジョージ監督）がある。ちょうどその十年前の 1994 年にルワンダで起こった、いわゆるフツ族の扇動者とその同調者による、ツチ族の人々に対する大虐殺を描いた作品だ。映画そのものは、ある外資系ホテルのマネージャーだったフツ族の男が、荒れ狂う暴虐の渦中で、妻も含めたツチ族のひとびとをホテルに匿い、国連軍の無力や白人たちの身勝手な逃亡、度重なる危機をくぐり抜けて、最後には全員国外脱出に成功させた実話の再現ドラマである。映画の手法としてはクラシカルだが、ルワンダ虐殺についての迫真的な報告であり、よくできた説得力のある作品になっている。ヨーロッパでは 2005 年春に公開され、さっそく大反響を呼んだ。この映画の話から説き起こすことにしたい。

事件では 80 万人から 100 万人近くのひとびとが短時日に殺害されたと推定されている。圧倒的な印象とともに映画を観

終わったときに、おそらく誰もが抱くだろう感想のひとつは、事件の具体的な場面は描かれているが、なぜこれほどまでの虐殺が 1994 年に引き起こされなくてはならなかったのか、いったいそのメカニズムは何かということが答えられていないという点である。これをどう名指せばよいのか。名指すとは危険なことである。名指すことによって、わたしたちは事態の異様さを飼いならす。しかし、それでもなおわたしたちは、出来事を解明し、敷衍する概念をもたなくてはならない。

映像には頻繁にラジオ放送が重なる。フツ族の大統領が、搭乗していた飛行機を突然撃墜され暗殺される。いまではこれは、フツ族のなかの一部の特権階級による謀略であることが確認されているが、この死亡事故を知らせるニュースをきっかけに虐殺は始まった。その前から、ラジオはツチ族への憎悪をひたすら煽り、社会のあらゆる矛盾をツチ族の存在に転嫁するメッセージを繰り返していた。映画のなかでは、「ゴキブリどもを殺せ」と

## 6 「ネクロポリティクス」の概念が問いかけるもの

いう不気味で機械的なフレーズがなんど登場することだろうか。あたかもこの陰鬱なメッセージに操られるかのように、銃や長刀をもった殺戮集団や政府軍、民兵、武装した警察官が、年齢や性別をとわず、ツチ族と見えるひとびとに無差別に襲いかかっていく。主人公の乗る車が、事件のさなかにやむを得ず霧の中の道を前後も確認できないまま進んでいると、突然デコボコ道に入り込んでしまう。かれがあまりの振動に車両から降りてみて、戦慄とともに気がつくのは、突然出現した道のデコボコとは、そこを埋めている殺戮されたおよそ数え切れない数の死体の海だったということである。それを轢いて車は進んでいたのだ。映画のなかの、もっともやりきれない場面のひとつである。

あたかも自明な異部族のように言われてきているが、本来はツチもフツも同一言語を話すひとびとであり、ただ農耕民としてのフツと遊牧民としてのツチに生活形態においてゆるやかに分化していたにすぎない。このような社会的差異を植民地支配において最大限活用し、少数派としてのツチを本質的に優位な存在としてつくりあげて、それを多数派のフツに対する支配の手先としたのが、ヨーロッパの植民者たちであった。ヨーロッパ

的な人種主義の本質化という機制こそが、このような異様な暴力の根源に存在している。おそらく大半の日本人も、ルワンダというアフリカの地で虐殺があったことを漠然と知ってはいても、それを、たいていは荒蕪地で行われた原始的な部族同士の争いのように考えて済ませてしまうことだろうが、映画は、われわれのそれとも本質的に変わらない具体的な市民生活の光景が、突然キリングフィールドに暗転するさまをつきつけてくる。ヨーロッパの植民地支配の遺産——まぎれもなくそれは、ポストコロニアルな負債であるには違いない。だが、それにしても、このような暴力の噴出をわたしたちはさらにどのような術語で解明し、いかなる概念的言語で分節化すべきなのだろうか。わたしはそのときにまっさきに、アキユ・ンベンベ Achille Mbembe の「ネクロポリティクス」という言葉を思い浮かべた。

ンベンベは南アフリカ共和国のウィットウォーターズランド大学で教える思想家である。かれがはじめて「ネクロポリティクス」という概念をもちいて現代アフリカの現状について論じた論文は、本誌に訳出されている。「ネクロポリティクス」とは、つまりは死の政治である。これを通じてかれは、抵抗・犠牲・恐怖

の関係の再配置を試みようとした。そして、この術語を用いて、海外事情研究所は、2005年2月5日の国際シンポジウム「帝国のネクロポリティクス—『原理主義』・戦争・生命」を組織したのである。したがって、当会議の報告を掲載するにあたって、組織者としてのもくろみとでもいうべきものを、いくらか説明しておかなければならないだろう。端的に言えば、わたしたちの関心は、現代のグローバル化された空間において作動し、いまやおびたしい死をあけすけに産出している帝国の権力を、どう概念化すべきなのか、というところにあった。

ミシェル・フーコーによる権力論的転回とも言われる権力理解の組みかえは、おおむね1980年代以後、旧来のような生殺与奪の権利を握る権力、「殺す権力」という理解に決定的な変容をもたらした。

『監獄の誕生』などを通じて、あるいはアカデミー・フランセーズでの「統治」をめぐる講義を通じて、外部に存在する権力という理解が、近代の本質的な権力観念としては表層的かつ部分的であり、むしろ微分化された権力、「生かす権力」こそが、遍在的に作用する力を分節化することに適合的であるという認識が、人文社会科学の現場にまたたくまに広がってきた。わたしたちもまた、このような

転回の意味を、乗り越え不可能な地平として受容している。このような権力は、「規律訓練＝権力」ないし「牧人司祭＝権力」として説明されるとともに、なによりも旧来の「殺す権力」に対して、「生かす権力」または「生命＝権力」として規定される。「生命＝権力」という視角は、戦後啓蒙がそうであるように、福祉社会における住民管理を民主的措置の達成としてのみ理解するかぎりは何一つ見えてこない権力性の次元を、はじめて可視化した。つまり、福祉社会を、生のすみずみまで管理し、馴致する支配様式として解明することを可能にした。これによって、わたしたちの生をめぐる作用する権力の理解は、格段に奥行きのあるものになったのである。

ところが、1980年代以後のグローバル化の展開のなかで、政治支配者自らが、新自由主義的イデオロギーをもって、当の福祉社会における「達成」を「小さな政府」の合言葉とともに掘り崩し始め、同時にこの福祉給付を否定的な過程として記述し始めた。奇妙なことに、一方で近代批判による福祉社会批判と、他方でネオリベリズム的な福祉社会批判とが、直接の現れ方としてはシンクロナイズするような場面が生まれてきてしまったのである。新自由主義は、新しい世

## 8 「ネクロポリティクス」の概念が問いかけるもの

界理解として、グローバル化が進行する最新の世界を覆いつつある。日本でも、十年遅れて、小泉政権以後、こうした新自由主義転回が急激に進行している。国民的主体化＝従属化の過程を批判する国民国家論だけではとうてい対応できない新たな事態としてのこの「新奇なる統治」を理解するために、いわばポストフーコー的な段階としての権力理解の再説明が必要となるゆえんである。このような「生かす権力」「生命＝権力」と新自由主義的統治の現実との齟齬、ないし乖離に関して、たとえばすでに、独自のフーコー再論を通して一石を投じているのが、酒井隆史の『自由論』や『暴力の哲学』であり、本会議のコメンテーターとして参加している渋谷望の『魂の労働』である。ニコラス・ローズ Nicolas Rose の『自由の権力 *Power of Freedom*』も同一の課題を担っていると言っていい。これら一連の作業は、けっしてフーコー的な権力論の撤回ではなく、いわばチューンナップとでもいうべき作業である。それを通じて、あらためて新自由主義による権力の作用をより適切に解明するための概念的素地を整えようとしてきている。少なくとも、したり顔の「ポストモダンのフーコー」の引用が、新自由主義的な支配言説と没批判的に癒着してしまい、そのこ

とによってますます批判の基盤をうしなった知的専門人が、エキスパートとして政治支配者に寄り添うというグロテスクな事態は、退けられなくてはならない。酒井や渋谷の直接の批判対象は、まさしくそうした知識人の頹落態であったのではないだろうか。

さて、回り道が長くなったが、ンベンベのネクロポリティクスもかかる文脈のなかに、その歴史的意味のひとつの筋道を確認することができる。かれの論考のなかで、現代思想の精緻な術語をもちいつつ描かれているアフリカ像にも、暗澹たる思いを禁じえない。そこには、『ホテル・ルワンダ』が描く暴力の噴出形態、死の無意味化と日常化が、あからさまに、グローバル化された現在におけるアフリカの現在態として突きつけられているからだ。明らかに「生命＝権力」を批判的に参照するように、あらためてンベンベはそうした事態を「ネクロポリティクス」と名指しているが、わたしはこれもまた、フーコー的な権力概念の、しかも切実なチューンナップの作業として理解したのである。

ンベンベのアフリカ像は、フランツ・ファノンの『黒い皮膚、白い仮面』や『地に呪われたもの』を通じてわたしたちが1970年代以後描くことができた、「あ

まりに深く奪われ、だからこそ、その基底から世界を撃つことのできる」アフリカ像とも乖離している。そこにあるのは、ひたすら主権者の決断がもたらす死の恣意性である。そもそもファノンのイメージに頼りつつアフリカを想起するというあたりが、わたしたちの理解がはらむ覚束なさの証左であるのかもしれないが、少なくとも、『地に呪われたるもの』は、実証のレベルはともかく、アジア、アフリカ研究者のひとつのパスでありつづけてきたのではないだろうか。その意味でも、ンベンベによるアフリカの現在からの問いかけは、厳しい挑発であるとともに、ある画期をなすのではないか。

もちろん、ことはひとりアフリカ像にかかわるだけではない。あくまでもグローバル化のなかでの「新奇な統治」の動態として、問題を捉えておかななくてはならない。ンベンベがアフリカの現在態として突きつけていることはまた、わたしたちの現在態でもある。ネグリとハートの『帝国』以後、帝国主義ではなく、帝国として、この「新奇な統治」を名指すことが一般化してきているが、まさに帝国の支配の形式として、世界のいたるところで、したがって、アフリカだけでなく、イラクで、アフガニスタンで、そしてアメリカ社会の底辺で、誰が生きてい

てよく、誰が死ぬべきかを主権者が指定する恣意的権力、つまり「ネクロポリティクス」を、普遍的な問題提起として引き受けたいと考えている。

以上を会議の前置きとして、その諸報告と討論記録を読んでいただきたい。会議では、ンベンベの「ネクロポリティクス」をゆるやかな前提としつつ、同志社大学神学部教授でありアメリカ原理主義研究で著名な森孝一（以下敬称略）、アメリカ史の専門家である本学教授の金井光太郎、コロンビア大学のギル・アニジャー Gil Anidjar が報告した。また、それに対するコメンテーターとして、前述した千葉大学の教員で気鋭の論客として注目されている渋谷望、一橋大学でも教え、『抵抗への招待』など、あたらしい批評実践のスタイルを作り出している思想家の鶴飼哲、そして東京外国語大学外国語学部が 2004 年の春から招聘することができた最初のアフリカ研究の専門家である船田ークラーセン・さやかが創造的に介入した。なお議論の整理は、南アジア近代史の専門家として知られる栗屋利江と、岩崎稔が担当した。

（いわさき みのる・東京外国語大学）